

夏休み、田舎の祖母の家に泊まりに行った。

「こんにちはー」

「よくきたねえあゆちゃん、暑かったでしょ」

平屋建ての日本家屋はお線香の匂いがした。

父方の祖母は早逝していた為、私の中でおばあちゃんといえど母方の祖母をさす。

「おじいちゃんに挨拶してきなさい」

「はい」

仏壇の前に正座し、鉦を叩いてお線香を手向ける。

遺影に写っているのは私が生まれる前に他界した祖父。旧家の跡継ぎとして躰けられたせいかな、とても厳しい人だったと母に聞かされていた。

「お線香あげた？」

「うんっ！」

「じゃあこつちいらつしやい、スイカ切ったげる」

「やったあ！」

居間のちやぶ台を挟み、よく冷えたスイカを食べながら報告する。

「通信簿は体育と算数以外5だったんだよ」

「すごいねえ、賢いねえ。お母さんに似たのかしら」

唐突にピンポンが響く。

「こんにちはー」

玄関にいたのはいとこの圭ちゃん。私から見れば母の妹の息子にあたる。

「げっ、あゆちゃん」

「げって何よ、失礼ね」

「一番乗りだと思つてたのに先越されたり、畜生」

「あちこちよそ見しながら歩いてきたんでしょ、どうせ」

「水路にザリガニいたんだもん」

「スイカ食べるかい？」

「うん！」

祖母が台所に引つ込み、追加分のスイカを持ってくる。

「おばあちゃんのぶんは？」

「気遣い無用だよ。年のせいかねえ、入れ歯に替えてから冷たいものが染みるんだ」

うちの両親は共働きで圭ちゃんちは母子家庭。どちらも帰省せず、子供だけを送るのが習慣になっていた。

「ずるい、あゆちゃんのスイカのほうがでっかい！」

「気のせいでしょ」

「ボクのと取りかえて！」

「こらこら喧嘩はやめて、みんなで仲良く分けっこなさい」

「はーい」

スイカは七切れあった。私は二切れ、おいしいん坊な圭ちゃ

んは三切れ食べた。

「ごちそうさま、お腹いっぱい」

「お粗末様」

残りはお皿ごとラップを掛け、祖母が冷蔵庫に持って行く。

「余らせちゃもつたいないからね」

虫捕りや川遊びに夢中になつてゐる間に日は暮れ、圭ちゃんと布団を並べて目を閉じた。

……が、枕が違うせいでなかなか寝れない。障子を隔てた庭では虫が鳴いている。

繰り返して寝返りを打ち、辛抱強く眠気の訪れを待ち侘びるうち、激しい尿意を覚えた。

慌てて圭ちゃんを揺り起こす。

「起きて圭ちゃん」

「うう……何？」

「トイレ付いてきて」

「やだよ、一人で行って来なよ」

「圭ちゃんがおしっこしたくなつても付いてつてあげないよ！」

「あゆちゃんは三年生のお姉さんでしょ、きっと大丈夫だって」

観念して布団から這い出す。極力音を立てぬように障子を

開け、体重を乗せる都度軋む廊下を歩き、突き当たりのトイレで用を足す。

「ふー」

すつきりして顔を上げると、おばけに怯えていたのが馬鹿馬鹿しくなる。

水を流し廊下に出、部屋に帰る途中、庭を挟んで反対側の廊下に人影を見かけた。

幽霊と見間違え心臓が止まる。

咄嗟に柱に隠れ、対岸の廊下を歩む小柄な影に目を凝らし、その正体が祖母だと悟った。

「こんな時間に……」

トイレとは方向が逆だ。祖母は屋敷の北側に向かっていた。眉間に川の字を刻んで身乗り出し、祖母が手に掲げたお皿と、二切れのスイカに困惑する。

翌日。

朝起きた私は、台所でお味噌汁を作ってる祖母に聞いてみた。

「おばあちゃん、昨日の夜スイカ持つて北の廊下歩いてなかった？」

「心当たりないねえ。ねぼけてたんじやない？」

「えー」

「あゆちゃんも知ってるでしょ、屋敷の北側は床が腐って危ないのよ。絶対に行っちゃだめよ、わかったね」

本当に見間違いない？」

「おはよー」

「あらあらお寝坊さんねえ圭ちゃん、あゆちゃんとはとく起きて着替えてるわよ。朝ごはんにするから顔洗ってらっしゃい」

笑顔の圧で深追いを封じられ、圭ちゃんが起きたのもあり、その時は大人しく引き下がった。

三日後……

仏間を覗いたところ、祖母が外出準備をしていた。

「どこ行くのおばあちゃん」

「ああ、ちようどよかった。お医者さんでお薬もらってくるから、少しの間お留守番よろしくね」

「まかせて」

「きまりはちゃんと守ること。わかった？」

「はあい」

薄手のカーディガンを羽織った祖母に釘をさされ、真面目くさって頷く。

「わかつてる。北側には行かないよ」

祖母の家には不思議なルールがある。屋敷の北側が立ち入り禁止になっているのだ。

あつちは床板が腐っており、踏み抜いたら危ないというのが建前上の理由だった。

「いつてくるね」

「いつてらっしゃい」

「帰りにアイス買つて来て」

圭ちゃんがちゃっかりおねだりする。

「はは、かわいい孫の頼みは断れないねえ」

手を振って祖母を見送り、しばらくトランプをして遊んだが、一時間もすると飽きてしまった。

「ねえ、探検ごっこしない？」

「えー」

「屋敷の北側に行ってみたい」

ドキリとした。

「おばあちゃんにダメって言われたじゃん」

「何があるか気にならないの」

「床が腐ってて危ないよ」

「心配性だなあ、そつと歩けば大丈夫だって」

圭ちゃんは一度言い出したら聞かない性格だ。この時も探検ごっこをしたいと駄々をこね、渋々付き合うはめになっ

た。

物心付いた頃から出入りを禁じられていた屋敷の北側に何があるか、興味を引かれたのも否定し難い。

脇の裏に甦るのは三日前、身を竦めるようにして真夜中の廊下を歩いていた祖母の後ろ姿。

床板が腐ってるんなら、おばあちゃんだつて行っちゃだめなんじゃないの？

わざわざ嘘吐いて孫を遠ざけたの？

なんで？（以下続）